

タイ王国北部の旅（2011 年の記録）

—タイ文化圏を往く—

前田栄三

京都大学学士山岳会

アジアの旅の始まりは 15 年程前に遡る。中東地域と成田を定期的に往復する途次離着陸するバンコクのドンムアン国際空港は、文字通りのハブ空港となった。それまで南周りの航路を利用することの無かった私には、実に興味深いアジアの旅路であった。

何時とは無しに気になることがあった。雲南省シブソンパンナ/タイ族自治州の州都・景洪、ラオスの旧首都・ルアンプラバン、そしてタイ王国の北タイの諸都市及びその近郊を訪問した際に感じた空気、これら地域に共通するように感じるその温もりは一体何だろう…、気になっていたことである。

ポンと膝を叩くような得心を得た思いがしたのは、「タイ（シャン）文化圏」という言葉に接した時である。2009 年 4 月、東京外国語大学 AA 言語文化研究所のクリスチャン ダニエルズ教授との懇談でのことであった。

タイ文化圏¹⁾

タイ諸語を日常的に話す民族は、中国雲南省西南部&東南部からヴェトナム西北部、ラオス、ミャンマー北部&東北部、及びインドのアッサム州に跨って分布している。これを「タイ文化圏 (Tai Cultural Area)」と呼んでいる。バンコクを首都とするタイ王国の北部も「タイ文化圏」に属している。この地域は、古都チェンマイを中心とする所謂「北タイ」である。主要な町には チェンライ、チェンセーン、メーサイ、パーイ、メーホンソン、クンユーム、メーサリアン、スコータイ等がある。タイ王国の中部（アユタヤ・バンコク、ナコン・サワン）、東北部及び南部諸州は、言語学的に「タイ文化圏」とは異なる、という。

2011 年に実施した「タイ文化圏 Study Tour」

下記 4 項目を目的として、2011 年 2 月と 7 月に実施した。

- (1) 北タイ西部の街、山地民の村々を訪問し、生活文化の一端に触れる。
 - (2) 古都チェンマイの博物館・古寺を訪れ、Lanna 王国等の歴史を偲び、学ぶ。
 - (3) タイ王国の最高峰 ドイ・インタノン (2565m) 山頂に立つ。
 - (4) 北タイに残る日本軍将兵の「慰霊碑」「戦争記念館」、遺品を保管している「寺院」等を訪れ、慰霊する。
- 始めに北タイの山岳地帯に住む少数民族について概観²⁾してみたい。



1. タイ国内にはおよそ 100 万人の山岳民族が居住し、その多くが北タイ各地に住んでいる。彼らの多くは山岳部に住み、伝統的な焼畑農業や狩猟採取で生計を立て、民族ごとの独自の宗教、文化、衣装で生活してきた。
2. タイ山岳民族が抱える問題は、経済的な貧困に起因する諸問題がある。それらは、教育・医療施設の不足、麻薬の密売、出稼ぎや売買春、その結果のエイズ感染などである。
3. これに加えて 1990 年代以降の山岳民族固有の問題として北タイの NGO は次の 3 つ問題に取り組んでいる。
 - (1) ひとつは国籍問題である。タイ政府は長いこと山岳民族をタイ国民とは見なしてこなかった。
 - (2) 次に、居住権の問題がある。山岳民族が多く住んでいる北部の山岳地帯はほとんどが国有地となっている。しかし、彼らの多くはタイ国の土地制度が制定される以前から何世代もその土地に暮らしていた。にもかかわらず彼らには住んでいる土地に居住し資源を管理し生計を立てる基本的な権利が認められてこなかった。
 - (3) 3 点めは、山岳民族の固有の文化、伝統、宗教の保護の問題である。
4. タイの社会は 1980 年代後半を境に急速に変化した。そのため山岳民族が抱える問題のように貧困に起因する古典的な開発問題と、家庭崩壊や環境汚染など先進工業国と共通する現代的な開発問題とが併存している。(2004~2005 年)現在のタイの問題は「貧困」そのものよりも「貧富の格差」にあるとってよい。

中国国民党軍の侵入と占拠³⁾

これに国際政治の荒波が加わる。国共内戦に敗れた中国国民党軍のビルマ・シャン州進入と山地支配、タイ〜ビルマ国境地域の広大な山岳地帯の不法占拠。そしてビルマ・中国共同の掃討作戦（1960年11月発動）に追われた国民党軍のタイ領内への移住である。第三軍の移住先はチェンマイ県タムゴップ、第五軍はチェンライ県メーサロン。

7月19日、私達はメーサロンを訪問した。緩やかな丘陵の続く丘の上から見ると、文字通り見渡す限り茶畑が広がっている。中華民国政府から最高品質の茶栽培を許可されているという。

Golden Triangle の位置とケシ栽培の様子 (アヘン博物館で手渡された絵葉書から転載)



雲南のラフ族、移住と国際政治の影⁴⁾

7月19日、私達はラフ族が移住したドイトウンを訪問。メーファールアン庭園を散策し、故王母陛下の御用邸内を視察した。1987年、ドイトウン王室開発プロジェクトが発足。まずはケシ栽培と焼畑を止めさせた。

その他、訪問した山岳民族の村々、王室プロジェクトのこと等

- ・ 2月22日、パーイ郊外の中華村（南湖山地村）と祭りの最中のリス族の村
- ・ 2月23日、ラフ族のボークライ村、メーホンソンの北方・茶の栽培を生業とした中華村（ラクタイ村）、シャン族のルアンタイ村。ルアンタイ村の上部の王室プロジェクトで開発されたリゾート地。
- ・ 2月24日、カレン族のホイ・ソータップ村（首長族の村）
- ・ 2月25日、メーサリアンの西南、50km 弱のサルウイン河畔の国境の村・メーサムレップ。
- ・ 2月26日、チェンマイ/ドイ・スティーブの奥の山地に住むモン族の村を訪問。
- ・ 7月17日、ラフ族の Makhom Pom 村（CHIANG DAO と FANG の中間）、隣接するカレン族の Yapa 村（首長族）とアカ族の Lorcha 村（タートン寺院の東方、メーサロンの西南方、ミャンマー国境に近い）
- ・ 7月18日、メーサイでミャンマーに初入国、Golden Triangle でアヘン博物館を視察、その後メコンを渡りラオスの村を訪問。中国資本が大々的にラオス領のメコン河畔に進出している。
- ・ 7月20日、チュンコーンでメコンを渡りラオスのフエサイへ。

タイの最高峰、ドイ・インタノン (2565m) 山頂に立つ

チェンマイから南西に位置するドイ・インタノン国立公園は、タイの最高峰ドイ・インタノンを中心に 482 km² の広がりを持ち、多くの観光客が訪れる、タイを代表する国立公園のひとつである。山地林を中心とする森が豊かに残り、野鳥の種類が多いことでも知られている。

梅棹忠夫さんはその著作⁵⁾の中で、メー・ホーイという村を登山基地とし、ジープを置いたこの基地から山頂往復に丸8日間を要したことが記されている。「メー・ホーイは、山すその明るい農村だった。水田の間に、20戸ばかりの農家が、ばらばらと立っていた」と描写している。今では、鶏の丸焼き店が軒を連ねる一帯が、彼らの登山基地だったのであろう。車道はここから長い登りに入る。私達は、この山麓の村から半日で山頂を往復した。勿論、舗装された快適な山岳道路と4輪駆動車のお蔭である。ケシ栽培に依存していた山岳民族カレンの自立を支援する王室プロジェクト (Royal Agricultural Station INTANON) も見る事が出来た。

チェンマイ郊外、タイ・ビルマ方面戦病没者追悼之碑と慧燈財団⁶⁾

2月21日、チェンマイの朝市で用意した供花(花輪)を持ち、歩いて「追悼の碑」に向かっていた私達は、境内を清掃していた女性から1枚の紙(碑建立の趣意書)を手渡された。私自身、地元チェンマイの情報誌で「碑」の存在を知り何度かお参りに訪れていたが、碑の建立に至る経緯に触れたのは、この時が初めてである。

以下、慧燈財団のホームページから抜粋して引用、掲載する。

『昭和16年12月に大東亜戦争勃発後、援蒋ルートへの破産及びインド独立を目指す日本軍は、インド独立義勇軍と共にビルマに入り、当時イギリス領であったインド北東部の都市＝インパールを占領すべく軍事行動を起こした。

しかし、作戦は困難を極め死者7万人余を出し、ついに昭和19年7月、この作戦は中止となる。その後日本兵は、タイ国メーホンソン県からチェンマイ県への道を通って、ビルマ(現ミャンマー)より撤退した。数多くの日本兵は、更にこの撤退の途中で亡くなり、遺骨や遺品などは撤退路に放置されたままとなった。

当時、撤退の日本兵に対してタイの人々は暖かかった。食事を与えたり、負傷し傷つきマラリア等の病気に苦しむ日本兵には薬を与えたりした。日本兵も、彼らの村の農作業や子守り等すすんで現地の人を手伝った。そしていつの日からか、日本兵とタイの人々との間には、微笑ましい穏やかな友情が芽生えたのである。それから年月は流れ激動の時代だった昭和から平成へと年号も変わり、日本人の誰もが、先の大戦の事など忘れて太平の享楽にふけていた。

平成元年、カンボジア難民慰問の帰りに佐賀県の僧侶及び遺族の一行は、チェンマイ県を訪れた。その時会ったタイの老僧よりこんな言葉が一行に投げかけられた。「ここにはまだ多くの日本兵が眠っている。あなた達日本人はそれを省みようもしない。そんなあなた達日本人は人間か!」老僧の言葉を聞き終えた後、偶然一行の中にいたインパール作戦の参加者が涙ながらに語りだした。「最初は遺体に土を掛けて通った。次は遺体をまたいで通った。最後には遺体を踏み越えて通った。」と。この事がきっかけとなり僧侶と遺族関係者で慧燈財団を設立し、この地に眠る日本兵の遺骨収集活動を開始した。

チェンマイ県メーワン郡バーンガート・サンカヨーム寺の裏にあった井戸から多くの遺骨が発見されたことから、慧燈財団は平成5年、その井戸の上に山下徳夫元厚生大臣による揮毫「タイ・ビルマ方面戦病没者追悼之碑」の題字をいただく追悼之碑を建立した。そしてその後の遺骨収集活動で発掘された約1万8千名の日本兵・軍属・関係者の遺骨を納め追悼を続けている。

この地に一人でも多くの日本人が訪れ、祖国の弥栄の為に命を賭して戦争の中で散っていった英霊を偲ぶ事が、ここに眠る1万8千名の勇士に対するなによりの追悼になるのではないだろうか。』

私達は、2011年2月21日そして7月16日に参拝してきた。長い間 廃寺となっていたサンカヨーム寺院は、7月に来た時には槌音高く再建工事が始まっていた。

その他、北タイに残るインパールの痕跡(慰霊碑など)

・ チェンマイ市内の寺院 (2月20日と7月15日、訪問)

かつて日本軍の野戦病院が置かれていたムンサーン寺院を訪問し、お参りをした。資料館には日本軍兵士の遺品や写真が展示されている。境内には立派な菩提樹があり、7月には沙羅双樹の花が美しく咲いていた。

・ チェンマイからパーイを経てメーホンソンに向けた道路建設工事(徴発されたタイ人は白骨街道と呼んだ)

・ 日本陸軍第15師団が担当。人が1人やっと通れるくらいの道を、山を削って4m幅の軍用道路を作っていった。道具はナタとクワ、これしかなかったといい、タイ人作業員が大勢亡くなったという。

・ パーイに残る日本軍の飛行場跡 (2月23日、車内から視察)



・ ホエパー村とホエパー寺院 (2月23日、訪問)

メーホンソンの北方約11kmの所にフィッシュケープ国立公園がある。この公園入口から2kmほどのところにホエパー寺院がある。ここでも敗走してきた日本兵が約400人、寺院から少し離れた場所に埋葬されたようだ。後日、御遺骨は全て収集され、母国に戻ったという。

・ メーホンソンの寺院 (2月24日、訪問) → 右の写真

プラノン寺院境内にある慰霊碑「ビルマ戦将兵鎮魂之碑」周辺を掃き清め、花と水を供え焼香。僧侶2名に読経を上げていただく。本堂にて参拝。

・ クンユアムの北数kmのところにある村の郊外、道端に佇む「祠」と街路樹の枝に架かる「戦友よ安らかに眠れ」と書かれた木片

(車内から黙礼。村内の寺院から少し離れた道路沿いの場所にある。)

・ クンユアムの戦争博物館⁷⁾ (2月24日、訪問)

私(前田)がタイに残る日本兵の慰霊碑の存在に初めて気が付いたのは、2003年9月3日付、朝日新聞朝刊の「声」欄にあった、タイ在住の当時74歳の方の投書であった。「タイの北部で日本兵の慰霊」と題し「タイ北部にチェンマイ市がある。インパール作戦に敗れた日本兵が傷病と飢えにもたえながら山越えをし、この地で亡くなったと言われている。」で始まる小文である。その中で、『中略』一方、チェンマイの北西の山地クンユアムに日本兵の遺品博物館がある。タイ人の有志により運営されている。館長は言う。「民家が日本兵の遺品を持っていた。優しかった日本兵の思い出を残さねばと思った。それが日本人の民族愛や国への誇りにつながればと考え、遺品を集め陳列している。残念なのは日本人がほとんど来館しないことだ。」(中略)こうした隠れた各地の善行に注目し、外国観光旅行の途中に訪問、慰霊してほしいと願う。』と結んでいる。戦争博物館には、米英に対する大東亜戦争開戦の詔勅が展示されている。5通発行された内の1通という。



・ クンユアムの戦争博物館の筋向かいにある寺院 (2月24日、訪問) →

ムアイトウ寺院の境内にある慰霊碑「ビルマ戦線将兵鎮魂之碑」周辺を掃き清め、寺の高僧に読経をあげていただく。碑の裏面に書かれた文言を紹介する。「旅人よ 日本の國を通ることあらば 伝えよかし ビルマ戦線将兵達は祖国の夢を見 帰ることなし この地クンユアム迄来て遂に力尽きぬ 時は昭和20年7月頃」とあった。



・ クンユアムに残る日本軍の飛行場跡 (2月24日、車内から視察)

・ Golden Triangle を見渡す丘の上に立つ彼我の慰霊碑 (7月18日、訪問)

Golden Triangle 一帯を見渡すことの出来る丘の上に「展望台」がある。更に50段ほど参道を上行くとプラタート・プーカオ寺院がある。759年頃の創建という古刹である。この参道の中程に、日本軍将兵の慰霊碑があった。注目すべきは、日本兵の慰霊碑の隣に、「理不尽な死を余儀なくされた現地の人達」を悼む「慰霊碑」があったことだ。この丘は、メコン河を見守る黄金仏の坐像の直ぐ背後にある。

おわりに

今回、北タイを旅して感じたことは、タイ国でのケシ栽培・麻薬の製造はほぼ消滅したように感じる。

Golden Triangle は穏やかな風景である。しかし、今も恐ろしい、麻薬犯罪という危険が一杯なことに変わりはない。現在の国境線である限り、地政学的に、今後も抜本的に改善されることは無いだろう。

北タイを訪れる時があれば、自分の知らない新たな痕跡を探索しつつ、慰霊を続けたいと思っている。

—了—

引用・参考文献

1. 新谷忠彦「タイ族が語る歴史」2008年3月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、叢書 知られざるアジアの言語文化 I、序文 Piii、P3~14

2. 田中治彦「北タイの NGO 活動の歴史と課題」2006年3月25日、『立教大学教育学科研究年報』第49号（2006年1月、101～122頁）所収の同名の論文の元原稿。
3. 片岡 樹「領域国家形成の表と裏 - 冷戦期タイにおける中国国民党軍と山地民-」東南アジア研究 42巻2号、2004年9月
4. クリスチャン・ダニエルス他「自然と文化そしてことば 2007. 03、特集；国境なき山地民-タイ文化圏の生態誌-」葫蘆舎、2007年8月。ISBN 978-4-86209-021-8
5. 梅棹忠夫「東南アジア紀行（上）」中公文庫、1995年、P196、225.
6. タイ国財団法人慧燈財団ホームページ
7. クンユアム第二次大戦戦争博物館ホームページ（メーホンソン県立クンユアム旧日本軍博物館）
8. 齋喜國雄「第1回タイ文化圏 Study Tour 行動記録・写真記録」雲南懇話会ホームページ



沙羅双樹（チェンマイ、ムンサーン寺）

沙羅双樹の花の色

（2011年7月15日、撮影）

図1. タイ文化圏概略図、新谷原図より眞島建吉作成。

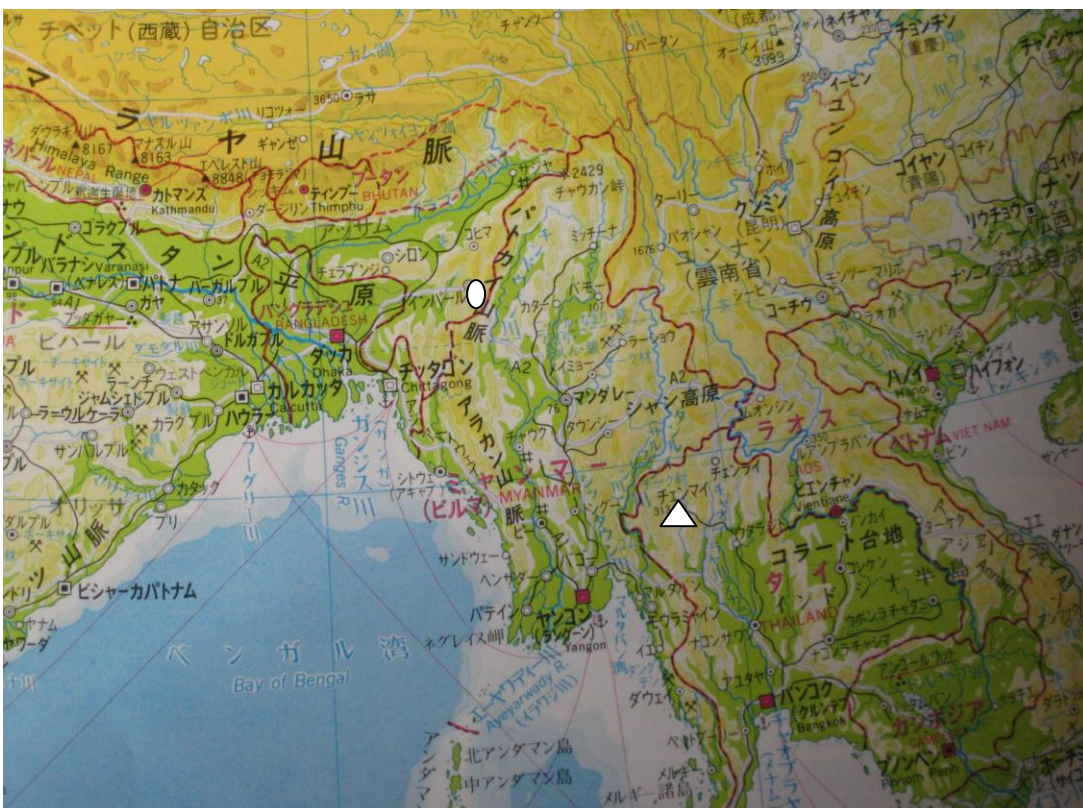


図2. インパール（インド、○印）とチェンマイ（タイ王国、△印）の位置関係（帝国書院編集部編、中学校社会科地図）

クンユアムはチェンマイの西方に位置し、ミャンマーと国境を接している。ビルマ作戦に於ける重要な兵站基地でもあった。サルウィン河の渡河地点ケマピューに道は続いており、更にトングーに繋がっている。この道はインパール作戦後、日本兵が敗走してきた所謂「白骨街道」といわれている。